



高度経済成長期大阪における学童保育運動の展開過程

著者	石原 剛志
発行年	2017-06-21
出版者	静岡大学
URL	http://hdl.handle.net/10297/00026236

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 21 日現在

機関番号：13801

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24530697

研究課題名(和文) 高度経済成長期大阪における学童保育運動の展開過程

研究課題名(英文) Development of after school care movement in the late 1960s (Osaka City)

研究代表者

石原 剛志 (ISHIHARA, Tsuyoshi)

静岡大学・教育学部・教授

研究者番号：10340043

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、1960年代後半から1970年代はじめまで、大阪市における学童保育運動を対象にした歴史的研究である。この時期は、運動の主たる担い手が、大阪市セツルメント研究協議会に集まる児童館職員や保育所経営者らから、共同学童保育所をつくる保護者や学童保育指導員に移行していく時期であった。大阪学童保育連絡協議会の結成(1970年)は、それを象徴する出来事であり、今日に至る大阪における学童保育運動・実践の出発点にあたる時期でもあった。

なお、本研究では、この時期の貴重な資料について保存と活用をすすめるため、重要なものについてデジタル撮影による影印本を作成した。

研究成果の概要(英文)： This study is a local historical study of after school care movement in Osaka City from the late 1960s until the early 1970s. The period was a time of profound change. So significant was this change that parents become activists of after school care movement. Symbolizing this change is the formation of Osaka Association of After School Care (Osaka gakudouhoiku renraku kyougikai) in 1970. This research empirically clarified this formation process.

The material used in this study was also advanced in degradation. To preserve and utilize it, I shot with a digital camera and made a facsimile edition.

研究分野：社会福祉学、教育学

キーワード：学童保育 共同保育 セツルメント 大阪市セツルメント研究協議会 大阪市学童保育推進協議会
大阪学童保育連絡協議会 大阪保育運動連絡会

1. 研究開始当初の背景

学童保育に関する日本の研究は、学童保育の実践や運動、制度に関する蓄積はあるものの、歴史(的)研究や国際比較研究などはほとんど行われてきていない。2010年に学童保育に関する学術団体「日本学童保育学会」が設立されて、ようやく、学術的な歴史的研究や国際比較研究が着手されるようになった。したがって、日本の学童保育史について、実証的な研究はほとんどなく、通史もない現状である。

2. 研究の目的

大阪市セツルメント研究協議会がまとめた『学童保育 大阪市のあゆみと現状』(1968年3月)によれば、この頃までの大阪市における学童保育のあゆみについて次のように記していた。

「……大阪市における学童保育の実施施設のほとんどのものがこのセツルメント[研究協議会]に加盟していると云えるのである。そんなことから過去セツルメントでは学童保育だけを研究課題として取扱った時期もありセツルメントと学童保育の関係はまさに表裏一体の形を示して来たのである。

したがって大阪市における学童保育はセツルメントの歩みの中で発展して来たと云えるのである。云いかえればセツルメントと学童保育を切り離しては何も語れないし、セツルメントに加盟している施設の学童保育の歩みを無視しては一層何も語れないのである。そこで大阪市における学童保育の歩みとはセツルメントとそれに加盟している施設がたどって来た道であると云えよう。」(pp.22-23)。

しかし、そのわずか2年後には、共同学童保育所(保護者が共同出資し、場所を確保し、職員を雇い、運営する学童保育所)づくり運動の担い手である保護者らを含んで大阪学童保育連絡協議会が結成(1970年)される。さらにその後、大阪における学童保育運動のイニシアティブは、大阪セツルメント研究協議会に加盟する施設から共同学童保育所づくり運動を担う保護者と指導員に移る。このイニシアティブの移行は、学童保育所設置数など量的な面からも明らかであったが、それだけではない。学童保育の内容や方法について実践しながら創造していく担い手という面でも同様であった。

本研究では、こうした共同学童保育運動による学童保育運動の組織化と、共同学童保育運動による保育内容・方法の創造や研究の過程について、明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

筆者は、大阪保育研究所に所蔵されている未整理の保育運動資料について閲覧を許可され、本研究が対象とする時期の学童保育についても残されていることを確認した。これらについて史料批判を行いながら、歴史研究に求められる手法により、記述していった。

4. 研究成果

4-1. 大阪市学童保育推進協議会から大阪学童保育連絡協議会へー大阪における学童保育の実践・研究・運動のイニシアティブの移行

4-1-1 問題の所在

(1)戦後日本の学童保育の先駆け——「大阪市セツルメント研究協議会」加盟施設による学童保育

戦後日本で最初に行われた学童保育が、今川学園保育所で実施されたことについては、学童保育運動のなかでもよく知られていることである。

大阪市内で、この今川学園での学童保育実践を継承し、学童保育の実践と研究と運動に取り組んだのが、「大阪市セツルメント研究協議会」である。この研究協議会は、1957年、大阪市内の市民館、隣保館、社会館、児童館、私立保育所の職員らによって結成された組織であり(『つながろう 人、まち、そして夢 大阪市地域福祉施設協議会 50周年記念誌』2007年、p.1)、初代会長は今川学園の園長三木達子であった(前掲書)。

1963年4月になると、「大阪市セツルメント研究協議会」は、部内に学童保育推進委員会を設置、同年夏期休暇中の学童保育を、加盟8施設(今川学園、愛染橋児童館、さかえ隣保館、西成児童館、南方児童館、都島児童館、大阪神会館、四貫島友隣館)で実施した。

夏期学童保育は以後も数年にわたって続けられたが、「大阪市セツルメント研究協議会」加盟施設では、夏期にとどまらない学童保育実施に踏み出していくことになった(『学童保育——大阪市のあゆみと現状』1968年。)。1968年3月現在、「大阪市セツルメント研究協議会」加盟施設で学童保育を実施したのは16施設となった。

(2)大阪市学童保育推進協議会から大阪学童保育連絡協議会へー大阪における学童保育の実践・研究・運動のイニシアティブの移行

このように、高度経済成長期大阪市内における学童保育の実践・研究・運動を切りひらいたのは、「大阪市セツルメント研究協議会」とその加盟施設であった。

しかし、1960年代末から1970年代のはじめにかけて、大阪における学童保育の実践・研究・運動のイニシアティブは、保護者・父母自身による要求運動である共同学童保育運動を基盤とするものに移行していく。その経過の柱となるものについてまとめると、次のようになる。

1967年3月、大阪市セツルメント研究協議会を中心に、共同学童保育運動をも巻き込んだ運動体として大阪市学童保育推進協議会(略称「推進協」、初代会長三木達子)が結成された。

「推進協」による運動は、民間施設のみならず共同保育による学童保育をも助成対象とする「大阪市留守家庭児童対策事業助成要項」制定をもたらした(1969年4月)。また、今日まで続く大阪学童保育研究集会の第1回めは、1969年2月に開かれているが、その主催団体は「推

進協」であった。「推進協」がきりひらいた成果の大きさがよくわかる。

しかし、その後、自治体からの補助を勝ち取りこの組織の役割が終わったとする「推進協」(幹部)に対して、「推進協」や大阪市セツルメント研究協議会の内部では、自治体へのより一層の運動を求める立場からの批判が起きていた。

そして、この批判は、内部批判にとどまらず大阪学童保育連絡協議会の結成へとつながった(1970年4月26日)。他方、「推進協」は、その後、第2回の総会を開くこともないまま、その活動を終える。

わずか数年の間で、大阪における学童保育運動のイニシアティブは、大阪市セツルメント研究協議会から共同保育運動による学童保育運動へと移行したわけであるが、その移行は、大阪市セツルメント研究協議会や「推進協」の内部矛盾の激化・発展によるものであったともいえる。

この内部矛盾を主体的に担うことになった「大阪市セツルメント研究協議会」加盟施設で学童保育を担当した若手職員らの活動(同協議会内の学童保育部会、学童保育研究会)に注目し、その激化の契機となったのが1968年に東京で開かれた第3回学童保育研究集会であったことを示したい。

4-1-2 「大阪市セツルメント研究協議会」における学童保育研究会の活動

(1) 夏期学童保育の実施から常設設置まで

1963年より、「大阪市セツルメント研究協議会」では夏期学童保育実施とその研究がすすめられ、年間学童保育へと踏み切る加盟施設が増えていった。以下、大阪市セツルメント研究協議会『学童保育—大阪市のあゆみと現状』1968年より、経過を抜き出してみる。

1963年4月、大阪市セツルメント研究協議会内に学童保育推進委員会設置。夏期休暇中の学童保育実施計画を立てる。夏期学童保育を8施設が実施(今川学園、愛染橋児童館、さかえ隣保館、西成児童館、南方児童館、都島児童館、大阪神会館、四貫島有隣館)。7月、市内小学校の不在家庭児童調査を実施。

1964年 夏期学童保育25施設で実施。西成児童館らで年間保育(学童保育)を実施。

1965年 研究協議会内に「学童保育部会」設置。北市民館、四貫島友隣館、港隣保館でも年間保育(学童保育)を実施。夏期学童保育を22施設が実施。大阪市民生局への補助金交付を要望、協議会に交付(10万円)。

1966年6月、協議会で学童保育実施施設で母親就労調査を実施。大阪市への補助を要望。昨年度と同様の交付を受け、夏期学童保育を24施設で実施。

1967年3月、学童保育部会では、下記のようなねらいから学童保育研究会を発足させる。

学童保育研究会のねらい

セツルメントの学童保育部会が、夏休みを機会に統一カリキュラムを持ってから5年になるのに、未だ曙光がみられないと言う現状に、セツルメントの若手の職員たちによって、学童保育の本質、意義を明らかにしようと、「指導員研修会」と言う名目でとり組み、月2回の学習会を持つ事に決めました。

.....学童保育に関心のある人の参加を希うためにも、名称を「学童保育研究会」と改め、1回は、本質的なものを、あとの1回は、技術的なものを学習することに決めました。」「(『学童保育部会報告』no.1、[1967年5月頃か])

(2) 研究会の活動と1年目の成果「学童保育要領」と「学童保育—大阪市のあゆみと現状」

学童保育研究会は、月2回、加盟施設(の職員)が持ち回りで順に運営や記録を担当してすすめられた。また、各回の記録は、ガリ版刷りで報告プリントが作成された。

学童保育研究会が1年めに取り組んだのは、毎年実施してきた夏期学童保育のまとめ(報告書作成)に加えて、「学童保育」とは何かを問う理論的なテーマ(例えば学童保育の対象、指導内容、設備、職員と保護者とのつながり、地域とのつながりなど)での検討であった。この後者の成果は、1968年3月に、大阪市セツルメント研究協議会学童保育部会『学童保育要領』(全3頁)と、大阪セツルメント研究協議会・大阪市社会福祉協議会発行『学童保育—大阪市のあゆみと現状』(全106頁)である。

(3) 全国集会としての第3回学童保育研究集会(1968年11月23日)

学童保育研究会のメンバーの第3回学童保育研究集会への参加は、メンバー自身にとってのみならず、大阪の学童保育運動を大きく変える契機となった。

後に全国学童保育連絡協議会となる学童保育連絡協議会は、第2回学童保育研究集会を、杉並公民館において、1967年10月1日に開催している。しかし、その報告をした『学童保育連絡協議会ニュース』No.15(1967年11月15日発行)によると、関東圏以外の参加者はいなかったようであるし、「全国」の研究集会としての性格はもたされてなかったようである。

しかし、この集会時の総会で「他府県からの参加者の要請もあり」全国組織を目指すこととしたというように、それは第3回からの課題となったのである。

実際、第3回学童保育研究集会(於・東医健保会館)は、1968年11月23日から24日にかけて2日間で開催され、また、「全国交流会」が1日目の17時から20時まで、プログラムに位置づけられたのである(『第3回学童保育研究集会 報告集』学童保育連絡協議会、1969年1月発行)。

(4) 学童保育研究会メンバーの第3回学童保育研究集会での驚き、大阪の運動への批判的意

識の芽生え

学童保育研究会では、第3回学童保育研究集会についての参加者による報告会が行われている。1968年12月3日と、その前に、すなわち第3回学童保育研究集会の直後の週に行われたようである。このいずれかの日程で配布された資料が、大阪保育研究所の書庫に保管されていた。

感想

さかえ隣保館 I (略)

港隣保館 K

2日間にわたって行われた会議で、東京の場合学童保育に対する父母の認識が非常に高く、父母自身からの活発な働きかけが大きな源動力となって、全てが運ばれている感じが深い。

今後大阪でも学校の教師、父母、学童保育の指導員が一体となって何度も話し合いの場を作り、一貫した考えのもとに(学童保育のあり方、指導内容、施設待遇の改善等)運動を展開し、子供自身が自分達の幸福の為にどのように受けとめ、考え、答えていくかを認識させ、集団の中で生かされる子供として自主的に活動していくよう我々自身も働きかけが必要ではないでしょうか。

北市民館 H (略)

西成児童館 H(略)

愛染橋児童館 M(略)

5人の感想に共通しているのは、東京の運動での保護者の認識の高さや保護者が運動の主体となっていることへの大きな驚きと、大阪での自らの運動の組織化についての率直な反省と見直しの認識である。そこで12月11日には大阪学童保育研究集会にむけた会議が開かれている。驚くことに、第1回大阪学童保育研究集会が開催されたのは、翌年2月2日である。180名の参加者で成功を収めたのである。

4-2. 共同学童保育における学童保育指導員の主体形成と指導内容づくりの基盤

4-2-1. 大阪、特に大阪市における学童保育運動の歴史についての先行研究

(1)大阪保育研究所編『燃える放課後』あゆみ出版、1982年。(2)大阪学童保育連絡協議会編『ランドセルゆれて』労働旬報社、1990年。(3)大阪市学童保育連絡協議会発行『大阪市学童保育連絡協議会創立十周年記念誌 このまちで育ち合う』1995年。

4-2-2. 研究の課題

(1)共同学童保育の指導員による研究会の組織化への注目

1970年頃になると、共同学童保育所で働く指導員から、大阪市セツルメント研究協議会学童保育部会による学童保育研究会への物足りなさが示されるようになる。

当時、大阪セツルメント研究協議会に結集し、指導内容の研究や学習していた「指導員の多くは、他の仕事を兼任していたり学生ボランティアであったり」のなかで、メンバーの入れ替わりもは

げしく、いきおいゲーム、キャンプソング、あそびの技術的な講習などに人気が集まったという(『燃える放課後』p.186)。

『ランドセルゆれて』4章を執筆した堀江直子は、共同学童保育所で働く学童保育指導員を、セツルメント運動のなかで仕事をしてきた学童保育指導員とは異なる「新しい型の指導員」とし(p.196)、さらにセツルメント運動のなかでの指導員の学習会が「『技術指導』にかたよりがちなことにあきたらなくなり、新たな指導内容を切りひろく方向にむかった」としていた(p.198)。

実際、1970年には、共同学童保育運動をも担ってきた大阪保育運動連絡会内に、共同保育の指導員の集まり(研究会)が別に組織されるようになった。

(2)共同保育運動としての学童保育が、(新しい)学童保育の内容や方法を要求したという仮説について

ここで考えてみたいのは、先行研究が、次のように指摘しているところである。

「1966年、大阪市に3ヶ所の共同学童保育が生まれた。乳児期から集団保育のなかで育つ子どもたちの姿に確信をもった父母たちが、ひきつづき学童保育へと運動を受け継いでいったのである。それは学童保育の活動内容を親と子どもの要求に根ざして把握し、そこに依拠して自らのしごとを創り出す指導員たちの出発点であった。」(『ランドセルゆれて』第4章、p.196)。

興味ぶかいのは、共同保育運動として成立・展開されたことが、それまでとは違う学童保育の内容を要求し、新しい仕事を生み出す学童保育指導員の出発点となったと指摘していることである。しかし、こうした把握や理解は、実証すべきものとして検討されたというよりも、1960年代から70年代にかけて同時代を生きてきた執筆者らによる結論、あるいは証言として語られていると見たほうがよい。学童保育運動を歴史的に明らかにしようとする場合に求められるのは、こうした把握を仮説として捉えなおし、資料に基づき実証的に明らかにすることである。

そこで、大阪における共同学童保育づくり運動のうち、1960年代半ばから1970年代はじめにかけてのものを対象として検討し、共同学童保育運動が、いかなる困難な条件のもとで、いかなる過程をへて保育の目的・内容・方法(当時は、「指導内容」)を確立していったのかについて検討してみたい。

4-2-3. はじめられたばかりの共同学童保育の困難

1960年代における共同保育所づくり運動や公立保育所づくり運動の経験は、共同保育による学童保育所を生み出した。1966年、大阪市内で、出来島、東淀川、城東すみれの3つの共同学童保育所がはじめられる。

しかし、その当時の共同学童保育所が置かれていた困難は、保育内容や方法をよいものとす

る以前のものであった。

(1) 場所の問題

例えば、出来島学童保育所では、次のように場所の問題を抱えながら出発をしていた。

「当初は、公団住宅 5-102 さんの住宅を借りて 6人の児童を指導員が一人で保育するところから出発しました。その後、利用者宅を1ヶ月交代で使用したり、たえず場所のもんだいに苦しみながら、それでも、働く母親の切実な願いにもとづいて 守り、育てられてきました。……」（『出来島学童保育所のしおり』）。

(2) 高額な保育料の問題

出来島学童保育所は、当時、保護者負担は月に3000円から3500円としていた。それがいかに高額であるかを、出来島学童保育所づくりをしてきた母親横田昌子は、次のように訴えた。

「町工場の中でパートタイムでもいいとか……募集しておりますのは大体1時間100円なんです。……そうしますと大体平均して1万5千円、いい人で2万円という実状です。……給食費……大体1,800円位になるわけなんです。……学童保育と一緒にやれるかと言いますと、3,500円負担をしなきゃいけない。5,000円をその1万5千円位の収入から出せる親というのは本当に限られているわけなんです。」（『シンボジュウム “不在家庭児童問題を考える” 会 報告書 大阪市学童保育推進協議会、1968年）。

(3) 定着しない指導員

親たちは、劣悪な労働条件である指導員に長く働き続けてもらうに、指導員への要求を控えてしまうという問題も抱えていた。

「指導員の問題も深刻です。身分保障もなく報酬も少ないので指導員は次々に替わり、今日まで十指に余る指導員が交代しています。緊急な時には父母が都合をつけ合ってみた事もあります。よい指導員をして欲しいと切実に望みながら、指導員に定着してほしいばかりに母親達の要求をいい出せなくて歯ぎしりをする思いでした。」（『東淀川学童保育の会』のあゆみ』『大阪の学童保育』no.2、1970年）。

(4) 共同学童保育の困難と指導員、内容

こうした共同学童保育所が、その初期の段階で背負った困難——場所の不安定さ、経済的負担の大きさ、次々と入れかわる指導員——を考えると、共同学童保育所（の誕生）が「学童保育の活動内容を親と子どもの要求に根ざして把握し、そこに依拠して自らのしごとを創り出す指導員たちの出発点」（『ランドセルゆれて』第4章、p.196）と捉えるのは楽観的にすぎる。あるいは、共同学童保育所づくりが、その初期における大きな困難を乗り越えたあとの「後付」の把握であるように思われる。

「新しい型の指導員」として共同学童保育所で

働く学童保育指導員を捉える堀江の見方も同様である。共同学童保育所が、「新しい型の指導員」を誕生させるまでには、働き続けながら子どもを集団のなかで育てたいという父母たち特に母親の 要求を受けとめ、指導員として働き続けていこうとする担い手、さらには指導員同士で支えあい学び合う仲間が必要であった。

それには1966年4月に大阪市に三つの共同学童保育所が誕生してから5年目、1970年をまたなければならなかった。1970年、天王寺なかよし学童保育所が開所し、大阪市内の共同学童保育所で働く指導員が互いに学びあう定例の研究会（大阪保育所運動連絡会内）が開始された。

4-2-4 天王寺なかよし学童保育の誕生

(1) 天王寺なかよし学童保育の誕生

公立保育所設置運動、共同保育所づくりを実現してきた天王寺保育所設置実行委員会は、看護婦であり、1年生のとき、我が子をカギっ子にしてきた母親の声にこたえるために「ひとりからでもはじめる」と、1970年4月、天王寺なかよし学童保育所の設置を決めた。天王寺保育所設置実行委員会は、夜間に保育を学ぶ学生を指導員として迎え、2人の子どもの学童保育所をスタートさせたのである。

(2) 父母の保育要求から学ぶ、父母の厳しい要求にも向き合いつづけた豊田さん

指導員豊田きみ代さんの指導員生活は、日々、毎年が新しい実践的課題との格闘であった。一年目は、1年生と2年生、たった2人の子どもとの生活。二年目には、8人の子どもとの生活。三年目には、最上級生が4年生になり、16人の子どもとの生活。そして高学年になった子どもは「学童保育おもしろいわ」と、地域の友だちと遊びまわる。親からは「先生、高学年の指導員についてもっと勉強せなあかんのとちがう？」と言われる。

全生研の理論に学び、子どもたちを班にわけ指導して、「自主的な管理体制を確立させること」や「子どもの核をつくり集団をたかめていくこと」などの言葉にであい、目の前が一度明るくなったと思ったら、父母からは「僕は[班]競争には反対だな、何のためにやるのか、子どももわかっていない。ただ指導員が早くならばせるためなど、そんなのはどうも賛成できんな」と意見を言われる（『私の成長と学童保育』）。

そんな父母からの厳しい要求からも学び、子どもたちの「おもしろいわ」というような要求にも向き合い続けたのが豊田さんであった。

天王寺なかよし学童保育所の保育をつくっていくにあたって、豊田さんは、「何ひとつなかった天王寺の町に四年間の保育運動をすすめて、保育所を建てさせてきた」父母、「こんな子どもにしたい」という切実な願いをもった父母、血の通った人間関係が子どもには必要なんだという父母から学んでいく。

そして、豊田さんは、学校を卒業してもなお、この仕事を続けることを選んだのである。

(3)天王寺なかよし学童保育所の指導目標とそれを具現化する指導員という存在

天王寺なかよし学童保育所の実践は、大阪市の学童保育運動の歴史をまとめた論文のなかで、「創世期の共同学童づくり」(播野京子「大阪市の学童保育」『このまちで育ち合う 大阪市学童保育連絡協議会創立十周年記念誌』大阪市学童保育連絡協議会発行、1995年)として位置づけられるものである。特に、天王寺なかよし学童保育所父母の会の運動や実践は、全国学童保育研究会でも報告され、父母会が発行した『こどもの汗とひかり』、そこに示された学童保育の指導目標などについては、学童保育関係者の間でもよく知られるものとなった。

「[なかよし学童保育所 1971 年度指導計画]

1 指導目標

- (1) 自分に自信をもって歩める子供にしよう(略)
- (2) 仲間を大切にすること子供にしよう(略)
- (3) じっくり考え、行動すること子供にしよう(略)
- (4) 持っている力を充分発揮できる子供にしよう
- (5) 物を創りだすことに喜びをみいだす子供にしよう

2 年間目標(略)

3 指導方針(略)。(大阪 天王寺学童保育所父母の会『こどもの汗とひかり』より)

こうした指導目標や指導方針も、創造的に、学童保育実践として具象化していこうとする主体＝学童保育指導員がいてこそ意味を持つ。豊田きみ代さんが、夜間の学校卒業後も、天王寺なかよし学童保育所の指導員として働き続ける決意をしたことは、そうした意味を持つものであった。

(4) 学びあい、支えあう、指導員の集団

「共同学童保育の指導員で集まって交流しようと、70年から午前中の学習会(大阪保育運動連絡会学童保育部会の市内学習会)を開始した。当時、ほとんどの共同学童保育では、指導員一人で悩みながら保育しているという状況にあり、この学習会に参加することは、その悩みに共感してもらえるだけではなく、指導員という仕事の自覚を高め、活動内容をつくりだす力を養うことになったのである。」(『ランドセルゆれて』p.198)

おそらく、豊田さんが、学校を卒業生しても働き続け、天王寺なかよし学童保育所の保育内容をつくりだすことができたのは、この学習会に参加しつづけたことが大きな意味をもったものと思われる。こうしてみると、豊田さんが学童保育指導員としての仕事をはじめ、夜間の学校を卒業後も仕事を続け、リーダーとして目されるようになる過程は、大阪市内の共同学童保育所で働く学童保育指導員が学童保育指導員の仕事の中身を創り、高めていった過程でもあったと思われる。

しかし、この学習会の発足当時の様子については、ほとんど、わかっていない。資料の発掘とともに、豊田さんをはじめ当時の関係者への聞き取り調査が必要である。

5. 主な発表論文等

(雑誌論文)(計4件)

石原剛志、権利としての学童保育を求めて放課後児童健全育成事業の現状と課題、日本の学童はいく、496号、2016年、pp.10-14(査読なし)

石原剛志、2016年改正児童福祉法と「児童の権利」(その1)、季刊保育問題研究、282号、2016年、pp.202-206(査読なし)

石原剛志、資格の概念と社会的機能、日本の学童はいく、2014年11月号、2014年、pp.15-20(査読なし)

石原剛志、子ども・子育て支援法下の学童保育の課題、経済、216号、2013年、pp.71-82(査読なし)

(学会発表)(計4件)

石原剛志、高度経済成長期大阪における学童保育運動(2)、日本学童保育学会第7回研究大会、日本福祉大学美浜キャンパス(愛知県美浜町)、2016年6月19日

石原剛志、学童保育概念の再検討ー「学童保育ビジネス」における「学童保育」観をふまえて、日本学童保育学会第6回研究大会、北海道大学(北海道札幌市)、2015年6月14日

石原剛志、高度経済成長期大阪における学童保育運動(1)大阪市における運動の展開を中心に(1950年代半ばから1970年代はじめまで)、日本学童保育学会第5回研究大会、仏教大学(京都府京都市)、2014年6月15日

石原剛志、子どもの放課後・地域社会論における生存権の位置づけに関する検討、日本学童保育学会第4回研究大会、岡山大学(岡山県岡山市)、2013年6月30日

(図書)(計5件)

石原剛志 他、ポイント解説 子ども・子育て支援新制度 活用・改善ハンドブック、保育研究所編、ちいさいなかま社、2015年、139

石原剛志 他、これでわかる子ども・子育て支援新制度、保育研究所編、ちいさいなかま社、2014年、84

石原剛志編、編集復刻版戦後初期人身売買/子ども労働問題資料集成(子ども労働資料)7~10巻、立花出版、2014年、1482

石原剛志 他、学童保育指導員のための研修テキスト、学童保育指導員研修テキスト編集委員会編、かもがわ出版、2013年、274

石原剛志 他、現代日本の学童保育、日本学童保育学会編、旬報社、2012年、285

6. 研究組織

(1)研究代表者

石原 剛志 (ISHIHARA, Tsuyoshi)

静岡大学・教育学部・教授

研究者番号:10340043

(2)研究分担者 なし

(3)連携研究者 なし

(4)研究協力者 なし